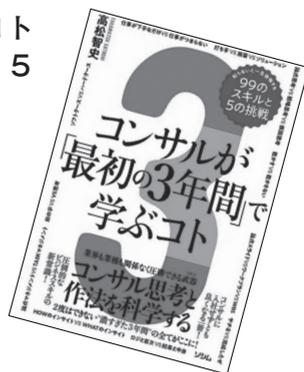


「コンサルが「最初の3年間」で学ぶコト知らないと一生後悔する99のスキルと5の挑戦」

著者：高松 智史

出版：ソシム

発行：2023年2月10日



「コンサルティング会社ってどんな仕事をする会社ですか。」と学生から尋ねられると、とても一般的な答えを返していた。ところが、コンサルティング会社への就職を希望する学生に、どのような準備を進めていくのがよいとアドバイスすると考えてみると、これが思った以上に悩ましい。企業の経営状況を分析し、潜在的な問題点を指摘し、解決策を提案するという仕事のイメージはあるので、経営学の知識を持つておくことは必要であるだろうし、分析方法やツールに対する造詣も深い方が良いだろう。経営だけでなく、マーケティングや情報システムなどのコンサルタントもあるが、これらは必要な知識が変わるだけなので大きく変わらないであろう。そういった知識でなく、コンサルタントとして求められるものとは何か、またコンサルタントとはどのような仕事であるのか、とても興味がわいてきた。そんな折に手に取ったのが本書である。

本書の著者である高松智史氏は、大学卒業後、事業企業を経て、コンサルティング会社に8年間勤務した。その後独立して、これまでの職歴で得たこと、特にコンサルティング会社時代に先輩から学んだことや、論点思考を伝授する会社を立ち上げた。今では、「考えるエンジン講座」を開催し、「考えるエンジンちゃんねる」というYouTubeチャンネルを開設するなど、法人・個人を問わず、様々な啓蒙活動を行っている。また、6冊の書籍を執筆しており、本書はその1冊である。本書では、タイトルにあるとおり、コンサルタント会社時代に学んだ思考方法やマナーなどを、「コンサル思考とお作法」(「作法」ではなく、「お作法」と著者も表現しており、著者の意向を汲んだ表現だと共感するので、以下、この表現で通す)と表現し、キャリアで役立った事例とともに紹介している。

本書は、導入とあとがきを除いて、大きく4章に分かれている。「叱咤激励の1年目」、「繰り返しの2年目」、「真っ向勝負な3年目」、「マネージャー

に挑戦の4年目」となっており、この章立てがとてもわかりやすい。それぞれの章の内容は、そのタイトルどおりで、入社1～3年目で学ぶことや学ぶべきこと、4年目で挑戦すべきこととなっている。この章立ての中で、1～3年で各33個、4年目で5個、合計104個の「コンサル思考とお作法」を紹介している。1つの思考やお作法は、ビジネスシーンでの例を交えながら、対立構造で説明されている。この対立構造での説明が本書の特徴である。

ずっとコンサルティング会社に勤務していたわけではなく、事業企業に勤務していた経験があるのが著者の強みで、この本で取り上げられる事例を身近なものとして理解しやすく、なるほどと感心させる説得力につながっている。また、対立構造での説明は、一部わかりにくいものもあるが、総じて内容理解を助けてくれる。両極端を示すことで、どちらがビジネス的に、コンサルタント的に正しいかが明確になっている。さらに、著者も自ら指摘しているとおり、「コンサルタント的な」と銘打っているが、コンサルティング会社に限らず、事業企業においても通用する思考やお作法ばかりである。私自身の経験と重ねつつ、「そうそう、わかるわかる！」と共感したり、「しまった、そうとらえるべきだったか」と反省したり、「その考え方で良かったんだよね？」と勇気づけられたりしながら読み進めることができた。

大学には企業で即戦力となるような人材の育成が望まれる昨今、大学ではグループ協業ができる能力や課題解決力を学生に身につけさせようと様々な取り組みがなされている。もちろん、それらの能力の涵養も重要であるが、その手前の部分、物事のとらえ方や考え方をビジネスパーソンとしてのものに修正することも学生に伝え、教えることができれば良いなと感じていた。そんなニーズに示唆を与えてくれるのが本書である。本書の第1章にあたる「叱咤激励の1年目」は、文系学部であれば演習（ゼミナール）を受講している間にぜひ読んでおいてほしい。または、就職活動中より、内定を取って、入社承諾後に、事前研修の一環として本書を読むことをお勧めする。当然、学生だけでない。就職後数年も経っていないビジネスパーソンは、ぜひ読むべきであろう。特に、努力のわりに、仕事が終わらなかったり、評価されなかったりする人は、就業年数によらず、本書から得るものがあると断言できる。私ももう少し早く本書に巡り合うことができれば、と思わずにはおれない書籍である。

起業教育研究会 企画委員
大阪商業大学 准教授
北室 康一